看護学生の自我状態と社会的スキル獲得状況との関連

坂本弘子[1)]　福森利智子[2)]　木村紀美[3)]

要旨

自己概念および他者概念に関する理論を用い，エゴグラムから構造分析をすることで，社会的スキル獲得状況との関連を明らかにし指導の在り方を検討した．自己否定他者肯定が52.0%と最も多く，自己肯定他者肯定が29.0%，自己肯定他者否定，自己否定他者否定がそれぞれ9.5%を占めていた．タイプ別得点の比較では，自己肯定他者否定が社会的スキル総得点，下位尺度6項目全てにおいて高かった．自己肯定の有無で比較した場合，自己肯定の方が自己否定よりも社会的スキル総得点が高く，下位尺度においては，計画のスキル以外の5項目で高かった．他者肯定の有無で比較した場合，他者否定の方が他者肯定よりも社会的スキル総得点が高く，下位尺度においても，ストレス処理のスキル以外の5項目で高かった．本学1年生の特徴として，自己否定他者肯定の学生が半数以上を占めるということを念頭に置き，今後対人関係が希薄にならないように，回避的にならないように指導をすることが必要である．

キーワード：看護学生　自我状態　構造分析　社会的スキル

Ⅰ.はじめに

Berne が創始した心理療法である交流分析の概念である自我状態は，「思考・感情・経験によっておこる一連の行動パターンが統合されたシステム」と定義される．交流分析では大きく分けて「親（P)」「成人（A)」「子ども（C)」の３つの自我状態を想定している．

P「親の自我状態」は育ててくれた人の影響を受けて取り入れた考え方や行動であり，父性的な自我である「CP」と母性的な自我の「NP」に分けられる．

A「大人の自我状態」は，知識・経験から冷静に判断する，科学的な思考・行動の自我状態である．

C「子供の自我状態」は，本能的な行動，子供のころの感覚を残している部分であり，自由な子供の「FC」と順応な子供の「AC」がある．

筆者ら[1)]は，看護学生が経験してきた生活体験や自我状態が社会的スキル獲得にどの程度関連しているかを明らかにし，今後の指導の方向性を検討した.その結果，自我状態は，NP優位型11名，FC優位型9名，AC優位型11名であり，CP優位型，A優位型がともに0人であった.その中で,社会的スキル獲得点数と自我状態との関連では,FC優位型が最も点数が高く，次いでNP優位型，低いのはAC優位型であった．生活体験と社会的スキルの獲得を主に検討したが，本研究ではさらに，自己概念および他者概念に関する理論を用い，エゴグラムから構造分析をすることで，社会的スキル獲得との関連を明らかにし，今後の指導の在り方を検討した．

1）八戸学院大学看護学科助教　2）駒沢女子大学看護学科助手
3）八戸学院大学看護学科教授

Ⅱ. 対象および方法

1. 調査期間は，平成 30 年 8 月に実施した.

2. 調査対象

対象は，本学看護学科 1 年生，75 名に質問紙を配布し，38 名の回収を得た. そのうち，回答に未記入がある 7 名を対象から除外し，31 名を調査対象とした. 有効回答率は，41.3%であった.

3. 調査内容（資料１）

基礎調査項目として生活体験と，調査時の自我状態，社会的スキルを測定した. 社会的スキルは，菊地によって開発された Kiss-18（Kikuchi’s Scale of Social Skill-18）を用いた. Kiss-18 は, 信頼性や妥当性も広く確認されており, 若者の社会的スキルを測定する 18 項目から構成されている. 下位尺度は，①基本的スキル（自己紹介・会話の継続），②より高度なスキル（依頼・謝罪），③攻撃に代わるスキル（他者とのトラブル処理・他者の援助），④感情処理スキル（自制心・感情表現），⑤計画のスキル（問題の発見・目標設定）⑥ストレス処理のスキル（矛盾した情報の処理・集団圧力への対応）の 6 つからなる.「5.いつもそうだ」「4.そうだ」「3.どちらでもない」「2.そうでない」「1.いつもそうでない」の 5 段階評定で，回答を求めた.

自我状態については，エゴグラムを用い，分析方法は自己概念および他者概念に関する理論を用い，自己肯定他者肯定（私もあなたも OK である）自己肯定他者否定（私は OK だが，あなたは OK でない）自己否定他者肯定（私は OK でないが, あなたは OK である）自己否定他者否定（私もあなたも OK でない）の 4 つの基本的構えのタイプに分類した.

4. 分析方法

結果の分析には，4steps エクセル統計を用いた. 社会的スキル Kiss-18 を目的変数とし，自我状態を 4 つの基本的構えのタイプに分類し，説明変数とした.社会的スキルの総得点，下位尺度の平均値の差の検定は一元配置分散分析を行った. また，自己概念および他者概念に注目し，それぞれを肯定群と否定群に分け，総得点，下位尺度の平均値の差の検定は t 検定（両側検定）を行った. 結果の統計的有意水準は 5%未満とした.

5. 倫理的配慮

対象者に対しては，調査票の表紙に，研究の動機，目的，方法，匿名性の厳守に関する配慮点を述べ，研究参加は自由意思であり，回答内容は全て統計的に処理し，研究目的以外には使用しないことを明記した.

調査票の配布は，講義終了後に行い，回収方法は回収箱を設置し，留め置き法とした.また，研究同意については，調査票の回答をもって同意とみなすことを説明した.

データは無記名で，ナンバリングを行い集計することで，学生個人が特定されることは無い. また，研究結果が学生の実習成績評価に影響することは無い. さらに，データ処理はインターネットに接続されていないパソコンで実施し，入力されたデータはパソコン本体ではなく外づけのメモリ媒体で管理した. 媒体そのものは鍵のかかった引き出しに保管し，研究終了後はデータを速やかに破棄することとした. 本研究は，八戸学院大学・八戸学院短期大学研究倫理委員会の承認を得て実施した.

Ⅲ. 結果

1. 基本的構えタイプ別人数

自己肯定他者肯定は 9 名（29.0%），自己肯定他者否定は 3 名（9.5%），自己否定他者肯定は 16 名（52.0%），自己否定他者否定は 3 名（9.5%）であった.

2. 基本的構えのタイプ別社会的スキル獲得状況（表 1）

1）総得点の平均値

社会的スキル総得点では，自己肯定他者否定が最も高かった．次いで自己肯定他者肯定，自己否定他者肯定，自己否定他者否定の順であった．

2）基本的スキルの平均値

基本的スキルでは，自己肯定他者否定が最も高かった．次いで自己否定他者肯定，自己肯定他者肯定，自己否定他者否定の順であった．

3）より高度なスキルの平均値

より高度なスキルでは，自己肯定他者否定が最も高かった．次いで自己肯定他者肯定，自己否定他者肯定，自己否定他者否定の順であった．

4）攻撃に代わるスキルの平均値

攻撃に代わるスキルでは，自己肯定他者否定が最も高かった．次いで自己肯定他者肯定，自己否定他者否定，自己否定他者肯定の順であった．

5）感情処理スキルの平均値

感情処理スキルでは，自己肯定他者否定が最も高かった．次いで，自己肯定他者肯定，自己肯定他者肯定，自己否定他者否定の順であった．

6）計画のスキルの平均値

計画のスキルでは，自己肯定他者否定，自己否定他者否定がともに高かった．次いで，自己否定他者肯定，自己肯定他者肯定の順であった．

7）ストレス処理の平均値

ストレス処理のスキルでは，自己肯定他者否定が最も高かった．次いで自己否定他者肯定，自己肯定他者肯定，自己否定他者否定の順であった．

3.自己肯定と自己否定の社会的スキル獲得状況（表 2）

1）総得点の平均値

社会的スキル総得点では，自己肯定の方が自己否定より高かった．

2）基本的スキルの平均値

基本的スキルでは，自己肯定の方が自己否定より高かった．

3）より高度なスキルの平均値

より高度なスキルでは，自己肯定の方が

表 1.　基本的構えのタイプ別社会的スキル獲得状況

	自己肯定 他者肯定 n＝9 名	自己肯定 他者否定 n＝3 名	自己否定 他者肯定 n＝16 名	自己否定 他者否定 n＝3 名	P 値
総得点	59.89	68.67	59.18	58.00	.614
基本的スキル	9.89	14.00	9.94	9.34	.203
より高度なスキル	10.22	12.67	9.75	9.33	.311
攻撃に代わるスキル	10.56	10.67	9.94	10.33	.894
感情処理スキル	10.11	11.00	10.00	9.67	.919
計画のスキル	8.89	9.67	9.31	9.67	.897
ストレス処理のスキル	10.22	10.67	10.25	9.67	.970

P＞0.05

自己否定より高かった.

4）攻撃に代わるスキルの平均値

攻撃に代わるスキルでは，自己肯定の方が自己否定より高かった.

5）感情処理スキルの平均値

感情処理スキルでは，自己肯定の方が自己否定より高かった.

6）計画のスキルの平均値

計画のスキルでは，自己否定の方が自己肯定より高かった.

7）ストレス処理の平均値

ストレス処理のスキルでは，自己肯定の方が自己否定より高かった.

4.他者肯定と他者否定の社会的スキル獲得状況（表 3）

1）総得点の平均値

社会的スキルスキル総得点では，他者否定の方が他者肯定より高かった.

2）基本的スキルの平均値

基本的スキルでは，他者否定の方が他者肯定より高かった.

3）より高度なスキルの平均値

より高度なスキルでは，他者否定の方が他者肯定より高かった.

4）攻撃に代わるスキルの平均値

攻撃に代わるスキルでは，他者否定の方が他者肯定より高かった.

表 2.　自己肯定と自己否定の社会的スキル獲得状況

	自己肯定ｎ＝12 名	自己否定ｎ＝19 名	P 値
総得点	62.08	59.00	.472
基本的スキル	10.91	9.84	.371
より高度なスキル	10.83	9.68	.225
攻撃に代わるスキル	10.58	10.00	.462
感情処理スキル	10.33	9.95	.673
計画のスキル	9.08	9.37	.687
ストレス処理のスキル	10.33	10.16	.847

P＞0.05

表 3.　他者肯定と他者否定の社会的スキル獲得状況

	他者肯定ｎ＝25 名	他者否定ｎ＝6 名	P 値
総得点	59.44	63.33	.461
基本的スキル	9.92	11.67	.236
より高度なスキル	9.92	11.00	.358
攻撃に代わるスキル	10.16	10.50	.729
感情処理スキル	10.04	10.33	.795
計画のスキル	9.16	9.67	.567
ストレス処理のスキル	10.24	10.17	.948

P＞0.05

5）感情処理スキルの平均値

感情処理スキルでは，他者否定の方が他者肯定より高かった．

6）計画のスキルの平均値

計画のスキルでは，他者否定の方が他者肯定より高かった．

7）ストレス処理の平均値

ストレス処理のスキルでは，他者肯定の方が他者否定より高かった．

Ⅳ. 考察

「基本的構え」[2] とは，自己概念および他者概念に関する理論で，人は「自己を肯定的にとらえているか，否定的にとらえている」「他者を肯定的にとらえているか，否定的にとらえている」と考え，自己および他者のとらえ方で，それぞれ4つの基本的構えのタイプが存在すると考えられている．

今回の調査では，9名（29%）の学生が「私もあなたもOKである」という基本的構えにあてはまり，対人関係は協調的で，対人関係で問題が生じることは少ないタイプである．3名（9.5%）の学生は，「私はOKだが，あなたはOKでない」という基本的構えにあてはまり，自己概念は肯定的だが他者を否定的にとらえているため，相手の欠点などが目につきやすく，批判する傾向があるため，相手が近づかなくなるタイプになる．16名（52%）の学生は，「私はOKでないが，あなたはOKである」という基本的構えにあてはまり，相手との関係が深まらず，回避的な交流となる傾向になるタイプである．3名（9.5%）の学生は，「私もあなたもOKでない」という基本的構えにあてはまり，相手との交流は停滞傾向が強く，無力的なものとなるタイプである．本学1年生の特徴として，自己否定他者肯定の学生が半数以上を占めるということを念頭に置き，今後対人関係が希薄にならないように，回避的にならないように指導をすることが必要である．

また，基本的構えの4つのタイプ別に社会的スキル獲得状況を比較すると，自己肯定他者否定が，総得点からすべての下位尺度で他のタイプより一番点数が高かった．次いで，自己肯定他者肯定であった．つまり，自己肯定のできる人は，社会的スキル獲得状況が高いということである．自己肯定と自己否定を比較しても計画のスキル以外はすべて自己肯定の方が高い得点であった．このことは，自己肯定感が高いほうが社会的スキルを獲得しているが，社会的スキルは回答者自身が認知している程度を表しており，客観的なデータではないため，あくまでも自覚しているという点に注意する必要がある．

また，基本的構えの4つのタイプ別の中で，最も社会的スキル獲得状況の点数が低かったのは，自己否定他者否定であった．その中で，計画のスキルだけが他のタイプより点数が一番高い結果であり，計画のスキルは問題の発見，目標設定であり，対人関係とは深くかかわらないためではないかと考える．

また，他者肯定と他者否定を比較したところ，ストレス処理のスキル以外は，他者否定が社会的スキルを獲得しているという結果であった．ストレス処理のスキルは，矛盾した情報の処理・集団圧力への対応であり，他者を肯定的にとらえることができるため，ストレス処理がうまく行えていると感じると考える．また，他者肯定より他者否定の方が社会的スキル獲得状況の点数が高いのは，あくまでも回答者自身の認知によると考える．

今回の調査は，1年生の状況であり，今後看護教育がすすんでいく中で，社会的スキル獲得状況や自我状態が変化していくことが予想される．木村ら[3] によると，学生自身が自己の自我状態に気づき，指導者も学生個々の自我状態を知った上で関わることにより，学生にあった指導あるいは効果的なかかわりができるのではないかと述べている．学生自身

が気づいて行動変容を行えるようなかかわりも必要と考える．基本的構えがどのタイプであるかということは，対人交流の改善に役立てるために重要な視点となり，特に看護教育の場面では必要であると考える．

Ⅴ. 研究の限界

自分自身で記入するエゴグラムの結果は自分からみた自分であり，周りからみた自分と別の結果になることもあり，また，直接的に基本的構えを評価するものではく，その時の状態を表すため，変動することを念頭に置く必要がある．

社会的スキルを測る Kiss-18 は，回答者自身が認知している社会的スキルの程度を把握するもので，客観的なデータではないということ加味する必要がある．

Ⅵ. 結論

1. 自己否定他者肯定が 52.0%と最も多く，自己肯定他者肯定が 29.0%，自己肯定他者否定，自己否定他者否定がそれぞれ 9.5%を占めていた．
2. タイプ別得点の比較では，自己肯定他者否定が社会的スキル総得点，下位尺度 6 項目全てにおいて高かった．
3. 自己肯定の有無で比較した場合，自己肯定の方が自己否定よりも社会的スキル総得点が高く，下位尺度においては，計画のスキル以外の 5 項目で高かった．
4. 他者肯定の有無で比較した場合，他者否定の方が他者肯定よりも社会的スキル総得点が高く，下位尺度においても，ストレス処理のスキル以外の 5 項目で高かった．

Ⅶ. 謝辞

本研究の主旨を理解し，調査にご協力を頂いた本学看護学科 1 年生に深く感謝申し上げます．

参考文献

1) 坂本弘子他：看護学生の社会的スキル獲得状況に関連する生活体験および自我状態，八戸学院大学紀要　第 57 号
2) 東京大学医学部心療内科 TEG 研究会編：新版 TEGⅡ活用事例集，金子書房，2011 年 12 月 20 日初版第 3 刷発行
3) 木村紀美他：エゴグラムの変動と看護学実習評価との関連．日本看護学教育学会誌．6：45-52．1996．
4) 篠崎信之：自我状態概念再考，東洋大学人間科学総合研究所紀要，第 7 号，2007，235－248
5) 諏訪茂樹著：看護にいかすリーダーシップ第 2 版　ティーチングとコーチング，場面対応の体験学習